メールニュース　2025年　8月23日付　NO.25235

―船旅羇旅―　東京都・伊豆大島を歩く②

東京のアイランド・伊豆大島

東海汽船株式会社の「さるびあ丸」に乗船して、伊豆大島の岡田港に到着しました。昭和のはじめから名物の椿や、あんこさんに代表される観光地として有名な大島は、川端康成の「伊豆の踊子」など多くの文学作品でも紹介されてきました。東京から一番近く大自然を満喫できる島には、岡田港と波浮港、元町港の 3 つの港があり、春夏秋冬、どの季節でも楽しめる観光地ですが、海に囲まれた島独特の海水浴や釣りが楽しめる夏の季節に歩いてみました。

火山島ならではの地形は別世界で、ハイキングやサイクリング、日帰り登山も満喫できるようです。都会の喧騒から離れ、大自然の中のゆっくり流れる島時間は特別でした。

波浮港と筆島

波浮港は昔、「波浮の池」と呼ばれていた火口湖で、大地震や大津波で海に通じ、港口の開削工事を完成して波浮の港と呼ばれ、沿岸漁業の中心地として、また嵐の避難港としても各地の船が集まり隆盛を極めました。波浮の港には、幸田露伴、西条八十、林芙美子など、多くの小説家が訪れています。

ここに資料館として残されている旧港屋旅館は、旧館が明治時代に、そして新館が大正時代に建てられたものです。木造 3 階建ての建物は当時を偲ぶ大変貴重なもので、そのころの宿泊客は漁業関係者や観光客が中心で常に大変な賑わいを見せていました。夜ごと宴の灯火が消えることはなく、その混雑を緩和するために階段が部屋の前後に設けられるなど、その賑わい振りは間取りにも表れています。

ノーベル賞作家の川端康成の小説「伊豆の踊子」の主人公カオルのモデルになったタミとその家族は波浮の港で実際に生活を営み、お座敷がかかるたびに旅館などで踊りを披露したそうです。旧港屋旅館はその当時の模様をまるで時をさかのぼったかのような雰囲気で再現していました。

穏やかな海面が広がる波浮港では、浜辺で子どもたちが水浴びを楽しんでいました。この波浮港の 3 kmほど手前に筆島海水浴場があり、展望所から景勝地・筆島を眺めることができました。筆島は約 30 メートルの岩礁ですが、数十万年前の火山島の名残と言われています。ポツンと一人、取り残されているような雰囲気が、波浮港だけにハブられているような感じがしました。一句。

筆島に哀愁重ね君想う

「海員だより」